

欲聞座「驚音忌」(二〇二四年六月十五日/新潟県・木場場教会)における法話

「二つに出遇い」 貝沼 宜徳

〈一〉

それでは、「三帰依文」を唱和したいと思います。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

それでは、お手元に、参考の資料として曾我量深先生の文章でございます。お手元にありますでしょうか。もともと『開神』という雑誌の巻頭言を飾っておった言葉です。まず、この言葉を一緒に拝読いたしまして、始めていききたいと思います。

「清沢満之先生」

今日は我等の恩師清沢先生の第三十四回の御正忌である。去年十一月十日大谷大学講堂の尊影の前に追恩の法要が勤修せられ、

本日はその御郷里三河大浜の西方寺に於て記念碑が建立せられます。私は『清沢満之全集』を拝誦し、久し振りに先師の德音を聴受し、その大恩鴻徳を讃仰せず居れないのであります。

抑も先師が身命を捧げて証驗せられたる内観の道なる精神主義の信念は決して先師個人の自性唯心の道でなく、釈尊の行信証教し給ひし仏道の本流であります。その内観の精神は文集全部を一貫して居ります。総て客観的事象、世界と人生一切を以て、之を与へられたる問題として最も謙虚平等の見地に立つて解決せざるべからずとなし、此与へられたる問題を解釈せんとせば、吾人は自己の現在の境遇の中に於て、満足の見地を発得せざるべからずとし、吾人が現在に於て客観的事象に対して差別の妄念に障碍せられて、平等の見地に住する能はざるは是れ畢竟主観的真理の自覚の未だ充分ならざるによるものにして、吾人は更に深く心機を開展して、実際に満足と自由とを享有すべきであるとせられました。

夫故に絶対他力の大道を表明するに当りても絶対無限の力が各自の精神に感ぜらるゝ所を基本とし、此内観の事実を離れて論理遊戲をせられなかつた。宗教は主観の事実である。内観の道は従果向因の方向であるが故に思惟と修行とは常に一如に平行し、静に願作仏心に専念することが自ら正道の大悲心と一致し、世界の平和に対する一転機たるであらふ。

現代濁乱の裡に悩む我々は此内観の慧燈を仰がざるを得ないのであります。(『曾我量深選集』第五卷所収)

非常に格調の高い、文語的表現の文章でありますけれども、この文章を読んでも、曾我量深先生が清沢満之先生から学び取られたのは、「内観」ということであつたということが、文章全体を一貫しておると思います。そして、文章の最後のところ、「内観の慧燈」というお言葉で、清沢先生の全体をですね、一語でおさえられているわけです。

ね。内観の慧燈という言葉です。この一語で清沢先生の全体を曾我先生がおさえておられる。非常に大事なことで僕はいただいているんですね。

ご承知のように、この「慧燈」というお言葉は蓮如上人が、時の明治政府から与えられた大師号です。浄土真宗では、親鸞聖人と蓮如上人、二人が明治時代に大師号を与えられた。曾我先生が清沢先生のことを内観の慧燈といわれるのは、やはり蓮如上人になぞらえて、曾我先生が清沢先生の仕事を、「真宗再興」ということを成し遂げられた生涯であつたんだと、こういうことが、この言葉からも味わうことができると思います。明治という時代にあつて、真宗再興の事業を清沢先生がされたという、そういうお心を込めて、慧燈というお言葉を選び取られたんじゃないかということが感じられることであります。

そして、もう一つ、慧燈というのは文字通り、仏の智慧の灯ということです。仏の智慧の灯。その仏の智慧の灯こそが内観ということなのだ、そのことを清沢先生から曾我先生が学びとられた。今日の私の話のテーマは「二つの出遇い」としております。「二つの出遇い」、一つは、曾我先生が清沢先生に出遇われたこと、そしてもう一つは、この清沢先生との出遇いを通して、内観の道に出遇われた。この二つの出遇い。繰り返しと、曾我先生におきまして、清沢先生と出遇われた、そして清沢先生との出遇いを通して、内観の道に出遇われた。二つの出遇いですね。それが、いま拝読しました文章によって明らかになろうかと思えます。

内観ですね。つまり、内観を離れて仏の智慧などはないということ。午前中に(木場教会の定例法話で)お話ししてくださった先生がですね、聞く他なしと、仏法は聴聞に極まると言われました。本当にその通りでございます。一生をかけて聴聞し続けてこられた方々をですね、たくさん見てまいりました。しかし、その焦点ですね。仏法を聞くといえますけれども、その焦点がはっきりしておるかどうか

ということがあります。ただボーっと聞いとるんでは……、まあ、毛穴から聞くという意味もありますからね、それでもいいと言えぱいいんですけども、しかし、その焦点ですね。何を焦点として聞くのか。この一点がはっきりしていないと、聞いても聞いても何を聞いておるのか分からない。しんどいこと、苦しいことを通してですね、仏法聴聞していく、そういうことを教えられてきたということがあるんですけども、いったい何が焦点なのか。仏法を聞くといった場合、その焦点は何なのか。そのことを教えてくださっておるのが、曾我先生が清沢先生から教えられた、内観という一点なんです。

曾我先生が清沢先生から学び取られた内観ということこそ、仏法聴聞の焦点である。そして、それは同時に、仏教全体におきましても基本中の基本なんです。内観ということが基礎中の基礎、最も基本にあるもの。これがしかし、現代の仏教界、ひいては浄土真宗、あるいは大谷教団で申しまして、この一点が全く見落とされたままと感じますね。だから、仏法聴聞に力が湧いてこない。聞けば聞くほど袋小路に入ってしまう。こういう感じを受けることもあるんじゃないでしょうか。話す方もですね、聞きたいように聞けばいいんだという、こういうところに留まってしまう。焦点がはっきりしないんですね。基本がなっていない。ここが蔑ろにされておるということが、やはり僕は、この曾我先生から学ぶ一番大事な一点でないかと思うんですね。

二二

内観ということが基本中の基本である。それこそが、清沢先生から曾我先生が学び取られた一番大事なことであるという、この一点ですね。それで、清沢先生のとこに帰ってお話ししますとですね、清沢先生が出されたお言葉の中で、色んな大事な言葉がありますけれども、やはり一番有名なお言葉は、「自己とは何ぞや。これ人生の根本問題なり」というお言葉ですね。最近、この「人生」が「人世」である

というふうにいわれておりますが、どちらでもいいですけどね、一人の「人生」といったほうが身に迫ってくることもありますし、「人の世」というても意味が広がりますから、どちらでもいいんですけどね、やはりこの「自己とは何ぞや。これ人生の根本問題なり」という、この言葉自身がすでに内観を表しておるような言葉と言っていると思います。自己とは何ぞや。これ人生の根本問題なり。やはり清沢先生の中で一番大事な言葉でないかということ、今の時代だからこそ、僕はやっぱり思うんですね。

と申しますのも、今日の時代というのはですね、なかなかこういう言葉が取り上げられなくなってきたという時代でもあるかと思うんですね。私はだいたい一ヶ月に一回か二回ぐらい本屋の散歩をするんです。本屋の散歩というのが好きでありまして、だいたい一ヶ月に一回か二回は本屋を散歩するということをしているんですが、最近、古本屋も減ってしまっていてですね、古本屋になかなか行けないんですが、まあ本屋もなくなってきましたけど、それでも月に一、二回は本屋をフラフラしているんですね。まあ、あんまり本が溜まるといってもいいですから、最近の本をなるべく買わないようにしてはいるんですけどもね。今どんな本が流行っているかなあとか、宗教書のコーナーを覗いてみたり、チラッと哲学書のところへ行つて、どんな人がおるのかなあというような、そんな散歩をしたりするんですね。この前、四月にですね、ご本山のしんらん交流館に呼ばれて話をしてきたんですが、その時に時間があつたもんですから、四条烏丸の大垣書店という、いま京都で一番大きい本屋と言われているんですけども、そこに行つてきたんですね。そこは本屋と申ししても店内には食料品のスーパ―もあったり、本屋の隣には寿司屋もあったり、それから餃子屋もありましてですね、色んな物が食べたり飲めたりするという、非常に新しいスタイルの本屋なんですね。面白いなあと思って、ぐるぐるぐるぐる廻つて色んな本を見ておつたんですね。それで、宗教書とか哲学書が

気になるもんですから、そちらのコーナーにも行つて、開いて読んでいたんですけども、そういう時に、ふと気が付いたことがあつたんですね。どういうことに気が付いたかといいますと、本の題名ですね。本の題名がですね、「人間とは何か」とか、「自己とは何か」とかでですね、こういう問いが表に出ておる本がないんですね。全くないんですね。「人間とは何か」「自己とは何か」というような、そういうことを匂わせるような本の題名が全然ないんですね。これがやっぱり現代という時代を一つ象徴しておるなあと思いますですね。本が売れなくなっているということはよく聞くんですけども、本自身がですね、何かもうそういう、「人間とは何か」「自己とは何か」ということを感じさせるような題名がないんですね。だから、そう思うと、清沢先生の、自己とは何か、これ人生の根本問題なりという言葉は、非常に大事な言葉だと思うんですね。その清沢先生から曾我先生が学び取られたのが、内観ということであつたんですね。自己とは何か、人間とは何かという、そこにやはり内観ということを学び取られたということだと思ふんですね。

「人間とは何か」ということですね。これもやはり新潟県出身の、有名な先生でありますけれども、金子大榮先生ですね。金子大榮先生が来年五十回忌を迎えるんですけども、その金子大榮先生がですね、人間とは何かということにつきまして、人間の独自性というものを挙げておられるんですね。人間の独自性。つまり人間の他の動物と違うところということですね。それは三点あるんですけども、一点目が、まずは人間が言葉を持つておるということ。言葉を持つておるということですね。「人間」という字で表されますように、人と人の間を生きるという。人間というのは、人間関係の中を生きるという意味です。親子であるとか、夫婦であるとか、兄弟であるとか、広く言えば、地域社会、職場、血縁、地縁とか、とにかく一人の人間が生きておるとい

ことは、様々な人間関係の中を生きておる、これが人間の事実ですね。そして、その人と人との間を生きる関係存在である人間はですね、言葉でもって関係していくんです。他の動物には、鳴き声はあっても言葉はない。

しかし、その言葉を持つておるといふ、言葉を持つて関係しておることが、非常にまた厄介な問題をいつも孕んでおるわけですね。特に今日の時代はですね、ハラスメントということが色んな方面で問題になるから、厄介ですわねえ。言葉一つが非常に厄介な時代になってまいりました。「言葉の暴力」なんていうこともよくいわれる時代です。それだけに、言葉の大切さというものが、いよいよですね、注目されてくる時代になってくるんじゃないかと思っています。

言葉の中で大切なのはですね、響きですね。響き。どういう響きを持っておるか。響きが残るんですよ、言葉を忘れても。私は色んな先生によく怒られたんですけども、今年で二十五回忌を迎えました藤元正樹先生という先生がおられましたですけども、質問をしますとですね、自分で考えろって言うんですね。ひどい先生でしたですね。自分で考えろといつて、何回か叱られた。腹が立って仕方がなかったですけども、しかし、先生が亡くなって、今年で二十五回忌を迎えましたけれども、この「自分で考えろ」と言われた、その響きだけは消えたことがない。その響きだけはずっと私の心の中にある。響きというのはそういうもんじゃないですかね。響きは消えていかない。そういうのがやっぱり言葉の本質じゃないでしょうかね。薄っぺらなところですね、言葉の暴力の問題とか、最近のハラスメントの問題もいろいろありますけれども、その響きという点を忘れて、言葉の上っ面などところだけを問題にするというのは、どうでしょうかねえ。

例えば、親の最高の愛情というのは、「出ていけ」でしょ。子どもに、親だけが言える言葉です。叱り飛ばす、「出ていけ」と。これが

親だけが子どもに言える、最高の愛情でしょ。僕はそれを、本願文でですね、第十八願の「唯除五逆誹謗正法」とあるんですけども、その「唯除」という言葉を、「出ていけ」といふうに受け取るんですね。「浄土から出ていけ」と。最高の愛情表現。逆説的愛情です。親だけが子どもに言える。それを言葉の暴力といえるかね。いずれにせよですね、人間が言葉を持つていて、それが人間が関係存在であることを示しておるわけでしょう。

〈三〉

それから、金子先生は人間の独自性ということで、手が独自の働きをすることというふうにいわれております。人間は手が足から独立してきた。他の動物の場合はほとんどが四本の足です。わずかに猿の一部だけが手の役割のようなものをするだけでありまして、動物は基本的に四本足です。人間だけが手が足から独立してきた。そして、様々なものを生み出してきたわけですが、物を作ったりね。音楽で言えば、楽器を演奏したり、あるいは絵を描いたり。

一番身近なのは文字でしょうね。文字を発明し、文字を基にして様々な文学作品を生み出してきた。全て手でなされてきた。そういう意味で、人間は、手で独自の働きをするということで、文化的存在だということですね。人間における文化、文明というのは、手で為されてきた。手で色んなことをするんです。料理もそうです、もちろんです。この手で様々のものを作る。そして食べるのも手です。手が人間の歴史を成り立たせてきた。ですから、手が足から独立してきたことによつて、人間が文化的存在であることを表している。全ての文化、文明というものを成り立たせてきた、そういう歴史を持つておるのも、全て手によつてということですね。

そして、もう一つが、自分が死ぬということを知りつつ生きていく。それを、私の言葉で言えば、宗教的存在。人間だけが、自分がいつか

必ず死ぬことを知りつつ生きている。自分が死ぬということ意識するのは何歳ぐらいからですかね。小学校に上がる前ぐらいですかね、幼稚園ぐらいでしょうかね。小さい時には色んな、虫やなんか飼いますからね、ああいうのが死んでいきますのを見ますからね。

夏になりますと夏祭りがありましてですね、金魚すくいをしますですね。私、金魚すくいが得意でありまして、よくやったもんなんですけども、金魚すくいはですね、必ず一番大きいのを捕ろうとするんですよ。そうすると、こう、破れてもね、下で受ければいいんですからね（笑）。必ず一番大きいのを捕ろうとして頑張るんですけども、睨まれますけどね。その金魚も死んでしまうんですよね。ずいぶんたくさん金魚が死ぬのを見ました、小さい時に。ああいうところから、やっぱり自分が死ぬということを少し意識してくるんじゃないかなあと思うんですけどもね。ただ、はつきり死ぬということを感じてくるのは、やっぱり自分の身近な人が亡くなった後でしょうかね。私の場合は、小学校五年生の時に、お祖父さん、お祖母さんが四ヶ月違いで続いて亡くなっていったんですね。昭和四十四（一九六九）年十一月一日がお祖母さんが亡くなった日で、開けて昭和四十五年の二月二十八日がお祖父ちゃんがお祖母ちゃんに相次いで亡くなっていきまして、うちは寺なもんですから、その度に大騒ぎになりましたですね、皆が集まってきて、もう本当に大変だったことを覚えてます。まだ私は得度しなかったんですが、初めて衣を着させられたという思い出も残っていますですね。やっぱり、ああいう、身近な人が亡くなっていく、死んでいくというを経験すること、自分が死ぬということ意識していくということになってくるんじゃないでしょうかね。

それが、人間が宗教的存在であるということの一つの証明だと思うんですね。死なねばならない人生に、どのような意味があるのか。な

ぜ生まれてきたんだろうか、なぜ生きねばならないのか、そういう問いというのはですね、もう忘れてしまってますわね。忘却の彼方。忘却の彼方なんだけれども、消えない。消えることはない。なぜ生まれたのか、なぜ生きねばならないのか、忘却の彼方だけれども、消えたことがない。それが、自分が死ぬことを知りつつ生きている、これがやはり、人間が宗教的存在であるということですね、証しでしょう。

そういう宗教的存在である人間だからこそ、やはり清沢先生の「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」という、この問いが大きな意味を持つんじゃないでしょうかね。もちろん、その背景には明治時代という、時代の影響があつたろうかと思いますが、やはり浄土真宗の歴史の中で、清沢先生が「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」という、この言葉を出されたというのは大きな意義があるんじゃないでしょうか。

かつて、若い頃にですね、西本願寺、本願寺派に友達がおりましてですね、お西とお東の違いというようなことを話したことがありました。やっぱり決定的なのは、大谷派のほうには清沢先生が生まれられたということです。お西のほうは大谷探検隊ですからね。それでまあ文化的なんですからね。築地の本願寺なんか作っちゃってますからね、非常に先見的なところもありますけれどもね。やはり大谷派の場合は、清沢先生の、自己とは何ぞや、この問いが、金字塔でしょう。大谷派が最も誇るべきことの一つじゃないですか。その自己とは何ぞやという問いを出された清沢先生のお仕事というものを、曾我量深先生は内観という一点でおさえられるんですね。それが、先ほど一緒に拝読しました、この文章に表されておるんですね。

内観ということに対して、外観ということがございます。曾我量深先生の『本願の内観』という本がございますが、その中に出てくる曾我先生のお言葉ですけれども、内観と外観を二つに分けてまして、内観を「従果向因」、外観を「従因向果」といわれます。そして曾我先生

は内観のほうを「精神生活」、さらに外観のほうを「常識生活」と、こういうふうに分けられるんですね。『本願の内観』という本の中に出来ています。僕は勝手に曾我量深先生の「内観三部作」と呼んでいるんですが、『本願の内観』、それから『内観の法蔵』、そして『教行信証内観』という三冊、曾我先生の本であるんですけども、題名に内観という言葉が付いてるんですが、私は勝手に自分で「内観三部作」といつているんですけども、どの本も素晴らしい本なので、もし縁があつたら読んでください。その『本願の内観』の中で内観と外観をですね、対比する形で述べられております。内観のほうは従果向因でありまして、それは精神生活を表す。外観のほうは従因向果でありまして、それは常識生活を表す。こういうことを『本願の内観』の中で曾我量深先生が表されておるんですね。

内観―従果向因―精神生活 外観―従因向果―常識生活

まず、外観であります従因向果ということはどういうことかと言いますと、因をですね、現実位置に置きます。果を未来に置きます。因より果に向かうという意味で、現実を因として、果を未来に置くという発想、ものの考え方です。因より果に向かうという、その場合、現実より未来に向かうという発想です。ですから、これは私たちの人間の常識でありますから、曾我先生は常識生活ということはいわれますけれども、つまり、未来を予想するわけです。現実を因として未来を予想していくというあり方です。

具体的に申しますと、それは、あなつてほしいという願望と、こうなつたら困るという不安ですね。願望と不安の未来です。誰でもが、未来に対して、あなつてほしいという願望を描くわけです。けれどもそれは、人間はそんな単純なものではないですから、あなつてほしいという願望だけではない、こうなつたら困るという不安も同時に持つわけです。単純に願望だけを持つということはない。必ず願望に

は不安が同居します。あなつてほしいという願望と、こうなつたら困るという不安が常に同居する。願望と不安の同居ですね。これが従因向果の外観の具体的な姿です。

そういう意味におきましては、今日の時代は「外観花盛り」の時代じゃないでしょうか。これは、現代の問題で申しますと、精神的な病というのが非常に増えております。精神科でありますとか神経内科にかかる人たちがどんどん増えてきておるといふ感じがいたします。うちの寺の近くにも精神科を開業されているお医者さんがございますけれども、毎朝九時から診察は始まるんですけども、もう毎日、行列ができていますよ。びつくりします。その前を通りまされども、また、こんなに早く、こんなにたくさんの方が並んでおるといふ感じがします。人気のあるラーメン屋みたいなものです。人気のラーメンもね、二十人ぐらいいつも並んでますけどね、あれと同じぐらいに並んでいるんですよ。もうびつくりします。そんな時代でしょ。

アメリカなんか行くともっとひどい。今のアメリカではですね、若者たちが手取り早くお金持ちに成りたいとするならば何になるかといひますと、弁護士か精神科の医者です。この二つが非常に流行つておる社会が、今のアメリカの社会です。色んな生活の中で困り事がありますと、すぐに弁護士に相談しに行く。それがもう日常的に行われているもんですから、弁護士としては非常に儲かる。あるいは、精神的な悩みを感じたならば、すぐにもう精神科医に行けという形です。カウンセリングだけでもいいからすぐに受けてきなさいという形ですね。そうやって色んな人に勧められる。これが今のアメリカの社会です。今はアメリカ人は教会に行かないそうです。モノの本で読みましたけれども、この十年間でアメリカの教会は三割が閉鎖されるであろうといわれています。日本人でも今、「寺離れ」なんてことも問題になっていますけれども、世界全体の「宗教離れ」です。困り事なら弁護士、心の悩みは精神科医。誰も寺に来てくれないんです。現代社会はそう

いう精神的な病というのがですね、非常に多くなっている。これを私は「外観花盛り」の一つの象徴というふうに見てるんですけれどもね。

〈四〉

つまり、この願望と不安ですね。願望が多ければ多いほど、実は不安も強くなっていくんでしょう。「自分らしく生きたい」ということをね、よくいわれる時代になりました。特に若い人だと思わんでもすけれども、自分らしくという言葉で、願望がいよいよ強くなってくる。それは、ただ単に願望が強くなっていくだけでなく、不安もどんどん膨らんでくるわけでしょう。願望と不安は同居する。この人間の事実というところをですね、見落としてはならないと思うんですね。いまNHKの毎朝の連続ドラマ、『虎に翼』ってやってますけれども、私も毎日観ているんですが、あの寅子さんはですね、私たちの親世代のちよっと上ぐらいなんです。戦前、戦中、そしていま戦後になりましたけれども、大変な時代を生きてこられた方ですが、あの時代の方々はですね、うちの親の世代もそうなんですけれども、個人の願望というようなものがですね、ほとんど、まあ無いわけじゃないんですけれども、持てなかったような時代ですね。特に戦中になりますと、男ですと赤紙一枚で軍隊に引つ張られますからね。自分の願望なんてものは蹴散らされてしまう。あるいは、大日本帝国憲法の下で言えばですね、家父長制度ですから、家の為に生きるということが当り前です。戦争になりましたら、それ以上に、国の為に生きるということが当り前です。戦前、戦中の日本の国民の姿は、そういう姿であつたわけです。その後、戦後になりますと日本国憲法が出てきました、個人が尊重されるという時代ですけれども、実は、大きく言えばですね、昭和の時代というものは、特に日本で強かったのが会社とか企業ですね。「会社人間」とか「猛烈社員」といいますですね。会社とか企業、あるいは組合という、そういうところですね、

家庭をも顧みず、一生懸命働いてきた。それがだいたい日本の男の姿だったんですけれども、そこには個人の願望以上に、常に、所属しておる共同体のために生きるということがあるわけです。会社、企業のために生きるという人たちが多かったわけです。

今はもう名前が変わりましたがすけれども、ナショナルですね、松下幸之助。うちの門徒が松下幸之助の秘書をやっていたんですよ。その人が、吉田さんというんですけど、その吉田さんからよく聞かされたんです、松下幸之助さんのことをですね。やっぱり日本の経営ということですね、社員はみな家族だと。そういう日本の経営をされていた。その象徴が、高野山でナショナルの社員の為のお墓を作ったんですわ。あれが日本の企業で高野山にお墓を建てた初めて、それからいくつかの企業も高野山にお墓を建てましたですけれどもね。社員は家族である、日本的経営という。そういうのが敗れてしまった。平成から令和になってきて、全くそういう日本の経営というのが成り立たなくなつた。だから、いよいよ個人として生きるということが当たり前になってきたのが、今の日本人ですね。共同体の為に生きるというようなことが変わってきてしまった。今では何よりも個人が優先される。だから、そういう時代だからこそですね、個人の願望というものがいよいよ強くなっていく。その個人の願望がいよいよ強くなれば、それに伴って、実は内面の不安も強くなってくるわけでしょう。願望と不安が比例していく。この人間の事実ですね。

この人間の事実が見落とされてはならないでしょう、今日の時代は。ですから、それが今日を生きる外観的な生き方の宿命でもあるわけです。願望がいよいよ強く、不安もいよいよ強く。共同体のために生きるなんていうことはですね、現代人はなくなってきた。そのために、個人の願望がいよいよ強くなり、それに比例する形で不安もいよいよ強く出てきた。これが僕の言葉で言いますと、外観花盛り時代の人間の病じゃないですかねえ。外観花盛りの時代の現代。願望の奴隷であ

り、不安の雇い主というね。そういうふうには、ちよつときつい言葉ですけれども、願望の奴隷であり、不安の雇い主である。

これを曾我先生はですね、すでに常識生活といわれているわけですね。仏教の言葉で言えば、先ほど皆様方と一緒に勤めました「正信偈」の中のお言葉で言いますと、邪見です。邪な考え方。「弥陀仏本願念仏邪見僞慢惡衆生」(『真宗聖典』第二版228頁)という、あの邪見です。その邪見というものはですね、広い意味におきまして、外観であると言つていいと思いますね。もう少し言えば、外観によつてもたらされてくるのが邪見であると。なにもそれを邪な考え方なんて思わないですわ、私たちの常識ですからね。

そういう外観である従因向果に対して、内観のほうを従果向因ということで教えられます。それを精神生活というふうに曾我量深先生はいわれるんですね。外観の場合は、現実を因として受け取り、未来を果とするという、私たちの常識的なあり方だったんですね。でも、それに対して内観の場合は、現実を果と受け取る。そして、その現実を常に掘り下げていく、それが因として表されるんですね。現実を果として受け取り、そしてそれを掘り下げていくという営み。これを内観という。

ただ、そういうふうにはちよつと難しく言つてしまうと何なんですけれども、朝の連続ドラマの、ヒロインの寅子さんの口癖ですよ、あの「はて」。つまり「なぜ」。「なぜ」という、疑問です。これが実は内観の第一歩です。これは、私が通つておりました小学校は城西小学校というんですけれども、名古屋城から一番近い小学校でありまして、名古屋城のすぐ西側にあるんですから城西小学校というんですが、その正門前にロダンの「考える人」の彫刻が置いてあるんですよ。有名なロダンの「考える人」ですね。その彫刻の下に、「いつもなぜと考へよう」と彫つてあるんですね。そこを通過して私は毎日、小学校に六年間通つたんですね。この内観ということを少し曾我先生から学ぶ

ようになりまして、この城西小学校の「いつもなぜと考へよう」という言葉を、ロダンの「考える人」とともに思い出してきますね。学校の前を通ると、ずつといつもいつも見るんですねけれどもね。

だから、内観と申しましてでもですね、特別なことではないんですね。なにも仏教の専売特許ではないんですね。「なぜ」ということ。「いつもなぜと考へよう」と。だから特別なことではないんですね。大事なことは、まず現実を常に果として受け止めて、そしてその因を掘り下げていくという、この発想ですね、考え方ですね。

そのことを最も端的なお言葉で表されておりますのは、蓮如上人ですね。蓮如上人が『御文』の三帖目の第九通の中でご命日のことをですね、明るい日というふうには、「明日」という字を当てておられます。『真宗聖典』を持つておられる方は、三帖目の第九通だったと思います。親鸞聖人のご命日は二十八日です。この命日のことをですね、明るい日、「明日」というふうには書かれております。これはやはり親鸞聖人のご命日、二十八日という、その事実を掘り下げる形でですね、親鸞聖人のご恩を掘り下げていかれた。親鸞聖人のご命日であります二十八日におきまして、どこまでも親鸞聖人のご恩を掘り下げていかれた。そのことを通して、そこに明るい日、明るい未来が開かれてきたことを表すわけでしょう。願望と不安の同居する未来じゃない。親鸞聖人のご恩をどこまでもどこまでも明らかにすることを通して開かれてきた明るい日ということですね。そういう意義を持つておるものが親鸞聖人のご命日である。これはやはり、蓮如上人が内観された事実が、こういうお言葉に表されておるわけでしょう。蓮如上人が親鸞聖人のご命日を、明るい日というふうには表してくださった、これが蓮如上人におけます内観の事実ですね。

これは大事なことを教えてくださっているんじゃないでしょうか。私たちの発想というのは、どうしても常識生活であります従因向果にいつてしまうわけですね。先ほど申しましたように、今日の時代とい

うのは、もう世界的な宗教離れ。私たちのほうで申しますと寺離れ。もう名古屋なんかでありますとお葬式もしないというようなことはちよくちよくとあります。直葬というんですけれども、東京なんかですと、もう三割を超えているといわれています。というようにですね、寺を取り巻く状況というのは大変であると。それをどういうふうに受け止めるかですね。外観として受け止めるなら、どうしよう、こうしようという、願望と不安しか出てこないんですね。そこにおいて、一步とどまって、どこまでもどこまでも内観というところに向かつていけるかどうか。

少なくとも蓮如上人は、あの時代ですよ、あの戦乱の混乱の時代の中で、どこまでも親鸞聖人からいただいたご恩をですね、明らかにしていくわけです。そのことに專注していくわけです。ああなつてほしいという願望や、こうなったら困るという不安ということは、無かったわけじゃないんでしょうけれども、そこを踏みとどまって、内観されていったからこそ、あの蓮如上人の大事業が行われたんじゃないでしょうか。その証左が、ご命日を明るいうふうによんでおられるということなんじゃないでしょうか。この態度ですね。内観の、精神生活に向かつていく勇氣ですね。これがやはり私たちの、いま聞法するというにおきまして一番大事なことでないでしょうか。

曾我量深先生はですね、精神生活ということをいわれてくるわけですが、これはやはり清沢先生の精神主義からとられたんでしょうけれども、精神生活が内観によつてもたらされてくる生活であるということでしょう。いま私たちを取り巻く状況の中で、外観だけに振り回されていくのか、それとも、一步踏みとどまって、内観という従果向因に向かつていくのか。こういう時代だからこそ、こんな現代だからこそ、外観花盛りの時代だからこそ、やはり内観という、この一点に絞って、聞法していくことが大事じゃないでしょうか。

聞く。聞くという、大事なことです。仏法は聴聞に極まるというこ

と、その通りでございます。そういうことを教えられてまいりました。ですが、その焦点ですね。初めに申し上げました、焦点を内観に置くかどうか。これがやはり私たちの聞法ということにおきまして、今日の外観花盛りの時代において、一番大事なことでないでしょうか。もう、ノンベンダラリと聞くことを許さないような時代状況になつとるんじゃないでしょうか。そういうことをですね、曾我先生のご生涯、清沢満之先生と出遇われた、そのことを通して、内観の道と出遇われたということから教えられます。その曾我先生から教えられた二つの出遇いということですね、今日のこのような外観花盛りの時代状況だからこそ、今こそ、私たちに大事なことを教えてくださるんじゃないか。そういうことを、改めて、今年の鸞音忌をつとめるにあたりまして考えさせられた次第でございます。ちょうど一時間過ぎましたので、これにて、話のほうは終わらせていただきます。どうも失礼いたしました。

【質疑応答】

A

聞き逃したのかもしれませんが、清沢満之先生から内観を教えられたというのが一つの出遇いということですが、二つの出遇いということの、もう一つの出遇いは何だったんでしょうか。

貝沼

清沢満之先生との出遇いを通して、内観の道に出遇われたということ。だから、一つは清沢先生との出遇い、二つ目は、その出遇いを通して内観の道と出遇われたという、それが仏教における基本中の基本という、基礎中の基礎ということですから、それが今日の時

代は、ほとんど忘れられて、あまり取り上げられることもなくなってしまうという時代状況だからこそ、いま私たちが聞法する、仏法聴聞することにおいてですね、曾我先生から教えられるということは、まずその一点ではないかということですね。

そこまで今日はお話しできなかったんですけども、実はこの清沢先生と出遇われたことを通しまして、曾我量深先生のもう一つの出会いとしまして、先ほどお勤めした「鸞音忌和讃」にも書いたんですけども、やはり法蔵菩薩との出会いということがあるんですね。だいたい年齢で申しますと、清沢先生と出遇われたのは曾我先生が二十八歳の時、それから十年後なんですね、法蔵菩薩と出遇われたというのは、「如来我となりて我を救ひ給ふ」という、それは「真我」ということで法蔵菩薩をいわれるんですね。ですから、二つの出会いも実は二重性がありまして、一つには清沢先生を通して内観の道に出遇われたということ、もう一つは清沢先生との出会いを通して、さらに法蔵菩薩と出遇われていったという、この二重の二つの出会いということが、いま大きな意味を持つと思うんですね。その場合、清沢先生が出されました「自己とな何ぞや。これ人生の根本問題なり」という問いをですね、内観されたということは、その問いを果として受け止められて、その問い自身を深められる形で、真我というお言葉で法蔵菩薩のことをいわれてくるんですね。自己とは何ぞやという、その問いを果として受け止められたんですね。そしてそのことがやがて真我としての法蔵菩薩というところに表されてくるという、この二重の出会いですね。二つの出会いそのものが二重に表されてくるという、これがやはり清沢先生を通して、曾我先生が学ばれていかれた、その曾我先生の内観ですね。だから、法蔵菩薩ということも、やはり清沢先生との出会いを離れては無いわけですよ。その法蔵菩薩のことを、また真我といってくるような曾我先生の内観についてはですね、少しお話ししたかったこともあったんですけども、そこまでいきますと、とて

も時間ありませんし、今日のところは、まず清沢先生との出会い、その清沢先生との出会いを通して内観の道と出遇っていかれた、そのことがまず一番、今の私たちにおきまして、まあ私の言葉で申しますと、外観花盛りの時代社会におきましてですね、非常に大切なことを教えてくださったおる、それこそが内観の道であるんだということで、そしてそこに焦点を絞ってですね、聞法、仏法聴聞に励んでいくということが、より大事なことでないかということをお話ししたようなこととです。聞くというこの焦点ですね。これをはつきりと教えてくださったおりますのが、曾我先生が清沢先生を通して、内観の道に出遇っていかれた、これはやはりもう燦然と輝いておる、それこそ内観の慧燈というお言葉で表してくださったように、大きな灯ではないでしょうか。

私たちの聞法生活、仏法聴聞におきましても、内観という、この一点ですね、この一点が焦点なんだと、仏教の基本中の基本なんだと、この一点をですね、やはり大事にしたいんですね。それだけなんです、私が言いたいのは、この一点だけ。この一点から突破していく。この現実をです。そういうことを、すでに指摘してくださったのが、先立つて蓮如上人なんだという。あの混乱、動乱の時代の中で、真宗再興の事業ということをしてくださった。それもやはり「御明日」というお言葉で表されておる、蓮如の内観の事業ですね。こういうことがやはり大事なことでないかと思ひまして、お話しさせていただいた次第でございます。

B

清沢満之先生の短い人生の中で、内観の慧燈に出遇われた時期というのは極々晩年に近いものだと思っております。それまでの江戸時代の甚兵衛さん、ないしは徳龍さんたちの、あるいは明治の吉谷寛寿や、ああい、それまでの大谷派の教学の中では、満之さんのような近代

の、西洋の、帝国大学のお雇い外国人教師から得た、いわゆる哲学的な思考は本山の教学の中では極々僅かだったと思います。そういう中で満之さまが内観の慧燈に出遇われた時期はいったったのか。それから皆我量深さんはこの近くの新発田の米北教校というところから真宗大学に入ったんですが、満之さんとは、生前の訾咳には直接多く触れられなかった。むしろ満之さんたちの書かれたものを、『教界時言』だとか、『精神界』だとか、文章から読み解いて、むしろ没後の満之さまから強い影響を受けたように思いますけれども、人生のいかなる時期で、満之さん、それから量深さんが内観の慧燈という問題に出遇われたのか、お考えをお聞かせください。一言で言うと、それまでの本山の教学を大きく大きく変えたのが満之さんの精神主義だといわれていますけれども、そのことのご領解をお願いします。

貝沼

やはり、清沢満之自身が西洋哲学を学ばれて、当時の東京帝国大学に行かれて、首席であったといわれていますけれども、清沢満之の生家の近くに覚音寺というお寺がありまして、その覚音寺にお母さんがよく通われとるんですね。お母さん、徳永タキさんといいますが、そのお母さんの影響ということがあろうかと思うんですね。お母さん、徳永タキさんが言われていたという「薄紙一枚が分からね」というお言葉ですつとご幼少の清沢満之は聞いておられたそうなんです。実はその覚音寺というお寺の三男坊で生まれたのが私のお祖父ちゃんでありまして、そこからうちのお寺、興西寺に来たんですけれども、そのお祖父ちゃんが「満之はえらい奴だ」「満之はえらい奴だ」ということを、よく言っておったということを聞いております。私が小学校五年生の時に亡くなっておりまして、その内容は聞いていないんですが、やはり清沢満之は、もちろん西洋哲学を学んだとか、『教界時言』を出したとか、『精神界』を出したとかという、そういう営みを、あ

の明治という時代にあつて、やられた。「自己とは何ぞや。これ人生の根本問題なり」という、そういう言葉を出された。ただし、一番もともとにあるのはですね、徳永タキさんが覚音寺の本堂に通われて、いつも帰ってくると、薄紙一枚が分からねと言っていたという、そういう世界で生きたいということがですね、清沢満之にとって一番大きかったんじゃないですかねえ。これは私もそういうふうに通っておったんですけれども、亡くなった同朋大学の神戸和磨という先生がいたんですけれども、あの先生も同じことをいっておられました。

清沢満之には直接の先生がいないんですよ、よきひと、善知識というような。だから、そういう意味ではですね、お母さんの徳永タキさんの「薄紙一枚が分からね」という、これをどう受け止めるかなんですけどね。それを分らないという、疑問として受け取るのが、少し教学的な言葉で言いますと、分からねという形で第二十願の世界を表してくださっておるということですね。これは受け止め方次第なんですけどね。だから、清沢満之先生のことをですね、元祖といういい方をすることもあります。元祖といった場合はですね、法然上人を指します。法然上人も直接の師匠はいませんでしよ。比叡山時代の源光、それから黒谷の時の叡空ですか、二人の先生から一字ずつもらって源空という名前をいただいていますけれども、二人の先生から名前をいただいたんだけど、それが浄土宗の先生であつたわけでもないですね。叡空なんかからは木の枕を投げつけられたというほど、法然上人は叱られていますからね。師がいないんですよ。そういうこともあつて、元祖といういい方で浄土真宗では法然上人のことを表します。そういう意味で同じ位置におられるのが清沢先生であらうかとも思われますね。直接、教学的な指導を受けた方がいない。けども、やはり徳永タキさんの、薄紙一枚が分からねという、この世界に悪戦苦闘されたんだということは、これは言えるんじゃないでしょうか。それを様々な生きた言葉としてですね、表してくださった。

それを受けた曾我先生になりますと、ご存じのように、曾我先生が二十八歳の時に上野の「精養軒」におきましてですね、当時の仏教徒大会が行われた時に、清沢満之先生が様々な批判、批難を受けたわけですよ。精神主義につきまして、色んな仏教徒の方から色んな批判、批難を受けた。そのことに對して、一切弁護されなかった。「自己を弁護せざる人」という文章が曾我先生にありますけれども、一切の弁解、弁護をされなかった。その姿に曾我先生は胸を打たれたということとを、晩年にいつてみえるんですね。それは曾我先生自身がやはり清沢満之先生の精神主義に對して批判的だったんですよ。しかし、その自己を弁護せざる人に出遇つて、そして、清沢先生のもとに行かれるようになったんですけれども、しかし、通われたことはないですね。曾我先生が浩々洞に入洞された時にはすでに清沢満之先生は愛知県の碧南、大浜にあります西方寺に歸つて、療養生活をしておられた。もう結核にかかつておられたわけですよ。その大浜の西方寺に行きますとですね、清沢先生が療養されておった部屋が今でも残っています。わずか三畳の部屋です。しかもすぐそこまで浜の波風が聞こえてくる。大浜の西方寺といえは大寺ですけれども、その中でも一番劣悪な部屋です。そういう中で一人、静かに亡くなっていったのが清沢満之の生涯ですけれどもね。やはり、曾我先生にとりましては、はじめ自分が批判しておったということがある。自分は親鸞における山伏弁円だ、釈尊における提婆であつたという、そういうことをいわれておるくらいですね、清沢先生に對して批判的だったんですけれども、上野の「精養軒」で自己を弁護せざる清沢満之に出遇つた、この一点から変わっていったんですよ。だから、直接に教えを受けているわけでもないんですね、曾我先生も。そういう意味でやはりこの曾我先生における、清沢先生との出遇いというものは、色んなことを教えてくださつておるわけですねえ。長い間一人の先生から教えを受けたと、そういうことでもないんですよ。しかも、先生に背くという形で、また出遇つて

いかれた。しかし、その営みそのものはですね、やはり曾我先生の生涯を通じて、清沢先生との出遇いを通して、内觀の道を徹底された生涯であつた。こういうことが大事な視点であろうかと思ひますですね。学問的な、教学的に問題もありますけれども、やはりどの先生も自分の体験してきたことを大事にされて、その体験されたことを果として受け止められて、因を掘り下げていかれたんじゃないでしょうか。清沢先生との出遇いを果として受け止められて、そして因を掘り下げていくと。そこに現れ出てきたのが、やはり法蔵菩薩であつたという面でしょうねえ。そういうこともあわせて考えさせられることでもありますね。

まあ、なにしろ新潟というところは、曾我先生、あるいは金子先生を生み出してきた、もう素晴らしい土地柄でありますからね、むしろ、私たちがこちらに來まして学ぶことが多いんであろうということとを、改めて思ひ知らされるようなことであります。先ほど、祖父江(佳乃)さんが「覺悟の親鸞」なんていう言葉を出されて、うまいこと言うなあと思つて聞いておつたんですけれどもね。(木場場教会に安置されている親鸞聖人像の)あのお顔を見ましても、眼光するどい親鸞のお像を見させていだただけでもですね、なにか非常に嬉しい気持ちになつて名古屋に歸れるなど思つております。どうもありがとうございました。

(二〇二四年六月十五日 新潟県・木場場教会)